

～ 接客空間についての意識特性 ～

神戸山手女子短大 ○中西 真弓 大阪教育大学 岸本 幸臣

目的 接客空間は公室構成に大きな影響を与える要因であり、その具体的影響が来客の種類や接客意識によって多様なことは既報¹⁾の通りである。またその特性の整理は、公室構成を考える際の重要な課題である。本報では接客空間に関わる意識特性の考察を試みる。

方法 上記の課題を解明するために女子短大生の家庭を対象に、その家族(父・母・子)にアンケート調査を実施した。調査内容と方法は前報²⁾と同じである。

結果 (客を招く場) 家族生活に一定の緊張を持ち込む改まった客は、家の外でもてなしたいと考える人が過半を占めるが、親しい客については家の中でとする人が80%強に達している。(接客室評価) 現状の接客室の広さ(平均 7.1畳)について60%弱が満足評価を与えているが、総合評価としての満足度は過半を切っている。(接客室の決定権) 接客室の使い方の決定権は母を中心に父や家族全員が関わるケースが70%以上を占め、中でも母が主たる決定権をもっているケースは約1/4に達する。これは住宅選択の決定権に母が関わる率の低さに比べると、接客行為に母の意識が大きく影響していることを示している。(希望の接客室) 接客室の希望室数は1室が55%で2室が30%であるが、住宅全体の希望室数との相関がみられる。また、希望する接客室面積の平均は10.3畳で、現状より約3畳広い。更に、接客室の様式希望は和室と洋室とに2分しており、それが2室志向の背景となっている。(接客意識) 接客室は独立志向は強いものの、接客機能の専用化の志向は極めて低い。しかし、その他の意識では保守的反応もかなり認められた。これらの接客意識と住宅条件・居住水準との関わりはさほど明確ではない。